

(表) 明治期に出版されたジャンヌ・ダルクの記事, 単行本 (1868 (明治元) 年~1912 (明治45・大正元) 年)

出版年	編作者/訳者	題名/書名	刊行形態	収録本/掲載誌/出版社
1869	フラセル、作楽戸痴鶯訳	『西洋英傑伝 二編上 仏郎西国女傑如安之伝』	単行本	英蘭堂
1873	平井正他編	「如安男姿」	単行本の一部	『世界蒙求 前編』青藜閣
1873	関吉孝訳	「仏蘭西の勇女ジヨアンの伝」	単行本の一部	『各国英智史略』宝集堂
1874	村田尚江編	「仏国如安達安克の事」	単行本の一部	『世界智計談 中』金松堂
1874	瓜生政和編	「仏蘭西如安達安克の話」	単行本の一部	『和洋合才袋 前集 坤』
1874	師範学校編	なし	単行本の一部	『万国史略 卷之二』文部省
1875	西村茂樹編	なし	単行本の一部	『校正万国史略 卷之六』
1875	田中耕造訳	なし	単行本の一部	『仏国史略 卷之三』文部省
1878	高橋二郎訳	なし	単行本の一部	『法蘭西志 卷四』露月楼
1883	松村操	『女侠全伝科戸風』	単行本	開成堂
1884	クリシィ、吉村喜一編	「紀元後一千四百二十九年若安阿亜爾英軍ヲ阿里安ニ敗ル」	単行本の一部	『万国有名戦記 乾』陸軍文庫
1884	山賀新太郎他	「若安頸疵」	単行本の一部	『東西蒙求 卷之二』団々社
1884	粟屋関一訳述	『回天偉蹟 仏国美談』	単行本	小笠原書房
1884	山下石翁	「列伝 女傑アークの伝」	雑誌連載	『女学新誌』第12-16号
1885	山田久作	「如安。達爾克功名ノ事」	単行本の一部	『記事論文小説種本』自由閣
1886	朝倉禾積編	『自由の新花 仏国女傑如安実伝』	単行本	丁卯堂
1887	渡辺虎太郎編	「ジャンヌ、ダルク伝」	単行本の一部	『泰西名士蓋世偉談』東雲堂
1887	西村茂樹	「若安達亜克」	単行本の一部	『婦女鑑 四』宮内省
1889	無署名	「ヂヤンデアークの伝」	雑誌連載	『日本の女学』第16-18号
1890	山本新吉	「豪傑婦人如安達安克の伝」	単行本の一部	『新作滑稽 楽しみ草紙』上田屋榮三郎
1890	坪谷善四郎	「女傑ジヨアンダークの偉勲」	単行本の一部	『仏蘭西史』博文館
1890	江連松花	「女傑ジヨアンダーク伝」	雑誌掲載	『穎才新誌』第683号
1890	クリーシー	「烈女約翰荷尔良之勝利」	単行本の一部	『泰西十五大決戦史』吉川半七
1891	伊東武彦編訳	「『仏国』ジャン、ダルク女。オルレアンの処女(むすめ)」	単行本の一部	『悲憤壯烈 才女列伝』三省社
1892	無署名	「ジヨアンダークの伝」	雑誌連載	『少年園』第89, 91号
1892	佐藤益太郎	「如安達亜克愛国ノ事」	単行本の一部	『正学要領 上』佐藤益太郎
1892	渋江保編	「ジャン、ダーク」	単行本の一部	『泰西婦女鑑』博文館
1895	宮崎湖処子	「オルレアンの少女」	雑誌連載	『家庭雑誌』第53-55号
1897	岳仙史	「如安達安」	雑誌掲載	『少国民』第9年25号
1898	高山林次郎	「ジャンヌ、ダルク」	雑誌掲載	『少年世界』第4巻27号
1898	宮崎湖処子	「オルレアンの少女」	単行本の一部	『世界古今名婦鑑』民友社
1898	瀬川さわ子	「若安達亜克」	単行本の一部	『名女伝』東陽堂
1898	桜川生	「ジヤンダークの逸事」	雑誌掲載	『家庭雑誌』第115号
1899	無署名	「ジヤンダーク嬢の伝」	雑誌連載	『日本弘道会叢記』第91, 93号
1900	隅谷巳三郎編	「ジャン、ダーク」	単行本の一部	『東西名婦の面影』開拓社
1901	中内蝶二	「惹安達安」	雑誌連載	『女学世界』第2-3号
1901	中内蝶二	「惹安達安」	単行本	博文館 (世界歴史譚 第32編)
1901	勁林園主人	「ジヤンダーク嬢の一節」	雑誌連載	『女子之友』第85-86号
1901	勁林園編	「ジヤンダーク」	単行本	東洋社 (西洋傑婦伝 第1編)
1901	シルレル、M.S.S 訳	「オルレアンのをとめ」	雑誌連載	『こころの華』第4巻4号・第5巻2号
1902	静子訳	「女傑ジヨアンの伝」	雑誌連載	『兵事雑誌』第7年14-20号
1902	岩崎徂堂他	「如安打克嬢」	単行本の一部	『世界十二女傑』広文堂
1902	村上濁浪編	「世界一烈婦 ジヤンダーク」	単行本の一部	『世界第一譚』大学館
1902	下田歌子	「ジヨアンダーク (仏蘭西)」	単行本の一部	『外国少女鑑』博文館
1903	シルレル、藤沢古雪訳	『悲劇 オルレアンの少女(をとめ)』	単行本	富山房
1906	無署名	「ジヤンダーク」	単行本の一部	『女性宝鑑』有信堂
1906	伊藤銀月	「仏王国を再建せし少女」	単行本の一部	『世界女性史』隆文館
1906	若葉女史	「ジャン、ダーク」	雑誌連載	『好学雑誌』第32-34号
1908	田村全宣	「ジヤンダーク」	単行本の一部	『人生と健闘』博文館
1909	前田長太	「ジャンヌ、ダルク」	単行本の一部	『世界武将伝少年史談』博文館
1909	無署名	「ジヤンダーク列聖式」	雑誌掲載	『少年世界』第15巻10号
1909	木村鷹太郎	「オルレアンの少女及びサラゴツサの少女」	単行本の一部	日吉丸書房『東西古今娘子軍』
1910	リギョール	『ジヤンダーク』	単行本	教学研鑽和仏協会
1910	金港堂書籍株式会社編集部	「ジヤンダーク」	単行本の一部	『少女鑑』金港堂
1911	丘の人	『家庭小説 勇しき少女』	単行本	岡村書店
1912	無署名	「ジャンヌ、ダルク」	単行本の一部	『世界名臣伝』博文館
1912	長橋大河	「聖女ジャンヌダーク」	雑誌掲載	『世界之日本』第3巻6号
1912	鈴屋花子	「女の乃木大将オルレアンの少女」	雑誌掲載	『少女の友』第5巻13号

(出典) ①高山一彦「明治日本におけるジャンヌ文庫」『図録 ジャンヌ・ダルク展』, 1982年。②渡邊洋子「明治におけるジャンヌ・ダルク」『独文学報』第14号, 1998年。③高山一彦『ジャンヌ・ダルク』岩波新書, 2005年。④国立国会図書館オンライン <https://ndonline.ndl.go.jp/> (2018年9月25日アクセス)。⑤国立国会図書館東京本館、日本近代文学館での資料調査 (2018年9月20-22日)。

一五一頁。

(23) 「序」、朝倉禾積『自由の新花 仏国女傑如安実伝』(丁卯堂、一八八六年)

※本稿は、科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「近代日本児童文学におけるフランス文化の受容——『赤い鳥』以前をめぐって」(課題番号: 18J00516、平成三〇年度～三二年度)の研究成果の一部をまとめたものである。

※本稿は、二〇一八年十一月開催の日本児童文学学会第五七回研究大会における研究発表の一部をもとに執筆したものである。

ていた点である。第二に、「如安之伝」のジャンヌ像は、勇敢さとともに慈悲深さも備え、その美徳が翻訳において強調された点である。

また、本稿第五章で示した「如安之伝」をもとにした再話の例は、「如安之伝」の記述が他のジャンヌ伝の中で繰り返され、新たな意味を付与されたり、他の執筆者によるジャンヌ・ダルク表象に影響していたことを明らかにした。

実は、山下石翁の「女傑アークの伝」については続きの話がある。その二年後に単行本として発表された『自由の新花 仏国女傑如安実伝』（一八八六）を読むと、今度は「女傑アークの伝」の本文が、そこにそのまま記されたと判明する。この作品の出版の経緯や、巖本善治との関わりは不明である。しかしその際も、物語の末の巖本の教訓は記されず、「序」として別の文が付された。そこでジャンヌは神功皇后、上毛野形名の妻といった、自ら戦場に向かった日本の伝説上の女性人物に並ぶものとされた。^(注2)

このような例は、「如安之伝」が様々な記述の中で再話の対象となり続けた可能性を示唆する。明治時代の児童文学作品において「如安之伝」の再話はそのような様相を示すのであろうか。この主題については、別稿で論じたい。

(注)

本稿では、京都大学人文科学研究所蔵の『西洋英傑伝』（三編六冊）（英蘭堂、一八七二年補刻）を底本とした。引用の際は引用文末尾に、編、丁数を括弧付で記す。*Tales of the Great and Brave* 第一巻、第二巻の原文テキストは以下を使用し、引用、参照の際は括弧内の略号、頁数を引用文末尾に括弧付で記す。*Tales of the Great and Brave*, London, J. Harvey and Darton, 1838 (*Tales*, I.). Idem, *Tales of the Great and Brave*, Second Series, Edinburgh, William Tait, 1843 (*Tales*, II).

資料からの引用の際には、適宜旧字を新字に改め、濁点を付し、ルビを省略した。付加したルビは「」付きで示した。また、合略仮名については分解して表記した。

(1) 高山一彦、「明治日本におけるジャンヌ文獻」、『図録 ジャンヌ・ダルク展』、(一九八二年)、一七六～七八頁。高山一彦、『ジャンヌ・ダルク』(岩波新書、二〇〇五年)、一一二～二五頁。

(2) 渡邊洋子、「明治におけるジャンヌ・ダルク」、『独文学報』第一四号(一九九八年)、一～二〇頁。

(3) 府川源一郎、『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究』(ひつじ書房、二〇一四年)、一七～三八、一六三～一六五頁。

(4) 木全清博、「万国史教科書の内容分析(1)」、『滋賀大学教育研究所紀要』第二二号(一九八八年)、三五～四二頁。

(5) 佐藤宗子、『家なき子の旅』(平凡社、一九八七年)、一四五、三四六頁。

(6) 木全清博、前掲論文、三五頁。

(7) 府川源一郎、前掲書、一九～二〇頁。

(8) 作楽戸痴鶯他訳編、『万国通史』(文部省、一八七三～七六年)。

(9) 岡崎勝世「日本における世界史教育の歴史——『普遍史型万国史』の時代」、『埼玉大学紀要』第五一卷第二号(二〇一六年)、四七頁。今津健治、「山内徳三郎著『ベンジャミン・スミス・ライマン氏小伝』」、『エネルギー史研究』第一〇号(一九七九年)、九二頁。

(10) 府川源一郎、前掲書、一六四頁。

(11) 高山一彦、前掲書、一四頁。

(12) *Tales of the Great and Brave*, London, J. Harvey and Darton, 1838. *Tales of the Great and Brave*, Second Series, Edinburgh, William Tait, 1843.

(13) 高山一彦、「明治時代の日本における書籍と肖像」、『図録 ジャンヌ・ダルク展』、(一九八二年)、一七四頁。

(14) <http://explore.bl.uk/>(二〇一八年九月二五日アクセス)

(15) John William Burgon, *The Portrait of a Christian gentleman - A memoir of Patrick Fraser Tytler, author of the "History of Scotland"*, London, John Murray, 1859, p.1-15

(16) 岡崎勝世、前掲論文、一三三～三八頁。

(17) 高山一彦、前掲書、五一～五四頁。

(18) 高山一彦、前掲書、一四頁。

(19) 『西洋英傑伝』、二編上、一四丁オ。

(20) 山内陽子、『女学新誌』、『近代婦人雑誌目次総覧』一期第一巻(大空社、一九八五年)

(21) 渡邊洋子、前掲論文、九頁。

(22) 山下石翁「女傑アークの伝」、『女学新誌』第一三号(一八八四年二月二五日)、(15)

ドンレミ村の説明に際し、「女傑アークの伝」では、「ロラン部の境界なる」という文言がなく、また「経文」が「聖書」となっているなど、微細な変化は認められる。しかし、両者の文章は酷似し、巖本善治は「女傑アークの伝」執筆の際に、とても大きな度合いで「如安之伝」を参照し、引用に近い形で作品を執筆したと言わざるをえない。こうした再話の様態は「女傑アークの伝」全体を通じて貫かれた。

しかし、「女傑アークの伝」は次の三点については、「如安之伝」と異なる。第一に、詳細な歴史的事実の記述は再話の対象とならなかった。第二に、ジャンヌが嘲笑された場面やジャンヌが自らの運命を嘆く記述は再話の対象とされず、それとは反対にジャンヌが「国家」に尽くす様子を表す言葉が附加された。第三に、「如安之伝」では物語の最後に、翻訳者・作楽戸痴鶯が児童読者への教訓を付したのに対し、「女傑アークの伝」では同じ箇所、再話者の巖本善治による女性読者への教訓が付けられた。

第一の点について、「如安之伝」で英仏百年戦争の説明が約三丁半の分量が割られ附加されたのは先述した。「如安之伝」でその説明はジャンヌの幼少時の記述と、成長後の記述との間でなされ、物語を断絶した面もある。しかし「女傑アークの伝」でその部分は書かれなかった。物語の断絶が避けられた、または詳しいフランス史の知識は必要なかったと考えられる。

第二の点について、ジャンヌがポードリクール守備隊長に王太子への謁見を直談判する場面では、「如安之伝」の場合、「汝さる及もなき望を勞思んより家に在て旧業の牛羊を牧し一生を送んこそ其身に適応き職務也べし」と、ジャンヌは嘲笑された(二編上、八丁オ)。しかし、「女傑アークの伝」ではその部分は再話の対象とされなかった。そして、「家に在て旧業の牛羊を牧し一生を送んこそ其身に適応き職務也」という言葉が書かれなかった代わりに、他の箇所では、ジャンヌが「国家」のために尽くす「忠義の念に凝り固まりたる」女性であるという表現が附加された。さらに、ジャンヌの死刑判決が下された場面では、「如安之伝」には、ジャンヌが「惨然として涙に咽」び、「断腸の悲哀」の言葉を官吏に投げつけたと書かれたが、「女傑アークの伝」にジャンヌの悲しみや恐怖の記述はなく、ジャンヌの落ち着いた様子のみが再話の対象となった。

つまり、「女傑アークの伝」では、「如安之伝」のテクストの大半が繰り返されつつ、ジャンヌの生涯の物語を中心に再話がなされ、さらには、ジャンヌの固い信念、

「国家」に尽くす姿、運命を甘受する強さが際立つように改変されたと言える。

この違いは、第三の点、すなわち物語の後に作楽戸痴鶯と巖本善治のそれぞれが付した教訓の違いにも見受けられる。作楽戸痴鶯は、「有功無罪の善人世に恐るべき死刑に遇(あひ)こと天鑑(あひ)実に空(む)きに似たり」と書き、「善人」の苛酷な運命に翻訳者自身が同情した。「我此ことを編むを好まざ」と作品刊行に対する躊躇さへ書かれる。しかしそれでも「英傑の功績賢善の行状」を読者に伝え、読者が「如安を憐み[…:]勸善の一端とも成る」ことを期待した(二編上、二七丁オ―二七丁ウ)。

それに対し巖本は、ジャンヌが「国家の為に非常の功を立て」たことをまずは評価し、ジャンヌの最期を知り、「世の中に善事を為す事を廢せん」などと思うのは「思はざるの考」と述べ、非難した。さらにキリスト教的世界観に基づき、ジャンヌは死後の「未来の裁判」で「正当のさばきを受け」と書かれ、「世の諸娘嬢」にも「此世の間にのみ思を運(め)らせることなく常に未来の榮福」を目指し、「国家の為に善事を行ひ玉ふ」ことを勧めた(『女学新誌』第一六号、一八八頁)。巖本はジャンヌを憐れむのではなく、死後の「榮光」と、現世における「国家の為」の貢献の大切さを女性読者に伝えようとしたのである。

「女傑アークの伝」に見受けられる「如安之伝」との相違点、そして物語の最後に付された教訓には、女性も国家のために有用な働きをせねばならないと考え、女性読者の社会意識を鼓舞しようとする再話者、巖本善治の強い意志が窺われる。

しかしまた、筆者にとって興味深いのは、女性読者を啓蒙する意図で書かれた「女傑アークの伝」のもとなり、繰り返されたテクストそのものは、『西洋英傑伝』という児童読者も意識された読み物として、「女傑アークの伝」発表の十五年前から存在していたという事実である。明治一〇年代半ば以降に現れる女性の「社会参加のモデル」としてのジャンヌ・ダルクは突然出現したのではない。それまですでにあった文学表象が利用され、読みかえられ、新しい意味を付与されて再び登場したのである。

おわりに

本稿では、『西洋英傑伝』の原典を特定し、翻訳と比較したことで、「如安之伝」の内容について次の二点が判明した。第一に、翻訳者の作楽戸痴鶯が、原文にはない史実やジャンヌのエピソードを附加し、より多くの歴史的知識を含む物語となっ

た彼女の行為について、翻訳では「凍死餓死」から人を救い、「如安が仁恵を仰ぎ陰徳を称賛をせぬハ無りけり」と書かれた。また、「慈悲の心」はオルレアン解放に彼女が向かう動機としても加筆された。オルレアンの人々の窮状を聞いたジャンヌが「元来慈悲広大なる性質なれば」（二編上、七丁オ）オルレアンを救おうとしたと書かれ、ジャンヌの到着を待つオルレアンの人々は「赤子の母を慕にも増りけり」（二編上、一〇丁ウ）と書かれた。こうした加筆からは、貧しい人や困った人を母のような慈愛で守ろうとするジャンヌ像が翻訳によって際立たせられたと言える。

①から④のように原文と翻訳文を比較検討すると、作楽戸痴鶯の配慮と工夫が分かり、教育的意図が次の二点において浮彫になる。

第一に、『西洋英傑伝』の翻訳では、児童から成人までより広範な年齢層の読者に適するように工夫がなされたと言える。戦闘場面の活写、ジャンヌの勇姿の表現はリズムよく、歴史的知識の少ない児童にも楽しめる内容である。しかし同時に、この本を読むことで中世フランス史の知識も読者は得られる。明治時代初期の国語教育と世界史教育の両方に貢献した『西洋英傑伝』の性格は、翻訳者の工夫に由来する部分もあると思われる。

第二に、「如安之伝」のジャンヌ像は、「豪猛なる勇威」と「慈悲の心」を併せ持った人物として描かれた点である。先行研究では、明治時代初期のジャンヌ・ダルクの表象には、愛国者の模範としての意味が込められたと指摘され、その勇敢さに着目されてきた。その指摘は適切である。しかし、原文と翻訳文とを比較して新たに判明したのは、翻訳では彼女の勇敢さとともに、母のような慈悲深さを表す記述についても丁寧に、より詳しく述べられ、読者が模範とすべき美德として重視されたとと思われる点である。

明治時代の日本に最初にジャンヌ・ダルクを紹介した、長文の資料としての「如安之伝」の記述、そしてそこで描かれたジャンヌ像は、それより後の時代のジャンヌ像にも影響を与えることとなる。

五. 再話の様相——山下石翁「女傑アークの伝」（一八八四）をめぐって

「如安之伝」がジャンヌ・ダルクを日本に紹介した「第一次再話」とするならば、

今度はそれをもとにした「第二次再話」が生まれる。本章ではその端的な一例を挙げたい。つまり、巖本善治が山下石翁の筆名で発表した「女傑アークの伝」である。「女傑アークの伝」は、『女学新誌』第二二号（一八八四年二月一〇日）から第一六号（一八八五年二月一〇日）に全五回で掲載された。『女学新誌』は、巖本善治近藤賢三らにより一八八四年六月に創刊された、女性の啓蒙教育を目的とした婦人総合雑誌である。山内陽子によると、封建的な男尊女卑の思想から、キリスト教を背景とした近代的・自由主義的思想へと脱皮する傾向を見せ、『女学雑誌』の創刊を準備した雑誌として重要な位置を占める。^{〔注20〕}

先行研究では、「明治一〇年代から二〇年代にかけてのジャンヌ・ダルク像は女性の啓蒙を目的とし『救国の英雄』という形で女性に社会参加のモデルを提供した」と指摘されたが、「女傑アークの伝」はその先陣を切るものであった。本稿末の表を見ると、同じ時代に、『婦女鑑』（一八八七）、『悲憤壯烈 才女列伝』（一八九一）、雑誌『日本之女学』での連載（一八八九）など女性読者向けの書籍や雑誌において、ジャンヌ像がいくつも掲載されていくことになる。

ところで、「女傑アークの伝」を読めば、これが「如安之伝」の再話であることは一目瞭然である。細かい表現が調整されつつ、ほとんどそのまま掲載されたと言っても過言ではないほどである。例えば、ジャンヌの幼少時に関する記述に関して、両者は次のようである。

仏国ロラン部の境界なるヲウクレウル府に接近きドムレミと称ふ僻村に住る農家の女也けるが双親甚貧しかりけれバ其子を学校に送りて芸術を修行さすべき生計無りける程に如安は読書の道に疎く毫も之を習知せざりしが唯常に神を崇み経文を誦するをのみハ教を受け成長に従ひ性質善良柔和にして慈悲の心最と深かりけり（二編上、一丁ウ～二丁オ）

仏国のヲウクレウル府に接近きドムレミと称する僻村に住みたる農家の女なりけるが双親甚だ貧しくて之を学校に送りて芸術を修行さすべき資金なかりける程にアークは読書の道にうとく毫も之を習知せざりしが唯だ常に神を崇み聖書を誦するとは怠らざりきとぞされば成長つにつれて性質善良柔和にして慈悲の心最と深かりけり（『女傑アークの伝』、『女学新誌』第二二号、一三八頁）

牢獄で身の危険を感じて生活していた彼女は「良好なる男児の衣ある」を見て「天帝より賜れる也」と再び男装し、それが「謀反」と断じられ死刑に至った、というものである(二編上、二三丁ウ〜二五丁オ)。

第二、第三の詳細なエピソードは管見の限りでは、当時の万国史教科書やその原典とされる歴史書には書かれていない。とくに最後のエピソードは、ジャンヌの裁判記録にある、いわゆる「ジャンヌの改悛事件」がもととなっている。^(注7)このような詳しい知識を作楽戸痴鶯が入手した経緯を知るには、彼の参照した「他書」の調査がさらに必要であろう。

③ 戦闘の場面での躍動感

戦闘の場面については、原文そのものが躍動感のある文章であり、翻訳文もまた講談調のリズミカルな文章で戦況を活写した。

Starting from her bed, for it was already night, she hastily armed herself, and seizing her banner, which she always carried in one hand, she sprang on the horse of her page, which she found waiting in readiness in the court, and rushed to the conflict. Her voice was sufficient to animate the soldiers, who were already beginning to give way before the English. She bade them turn and renew the attack. Her presence of mind and courage again changed the fortune of the fight, the English were defeated, and the French re-entered the walls victorious. (*Tales*, I, p.125-126)

〔引用者註〕如安ハ「忽ち臥床より踊出て鎧取て肩に引掛け彼綵旗を左手に握り宝剣を腰に佩ひ繫る馬に其伕飄と跨り鼻綱を断て唯一騎戦地を指て馳出ける扱も仏兵今ハ力衰へ精尽て既に敗走せんと見えたる折しも如安が烈敷号令に英気勃然と蘇復して踏届りて爰に戦闘を繰り返しけるが女將軍の豪猛なる勇威に勝運を取戻し英兵遂に討破られ城兵凱歌を唱て引揚けり(二二丁ウ)

生き生きとした描写は、児童読者を喜ばせたと思われる。また、先行研究で高山一彦は、『西洋英傑伝』において剣を振るい戦ったジャンヌの描写は史実と違うと

指摘した。^(注8)上の引用では、「宝剣」に関する記述は、作楽戸の加筆であったことが判明する。戦闘場面での「宝剣」の加筆は他にも一か所認められる。^(注9)しかし原作でもオルレアンの城塞戦で、敵兵に囲まれた彼女が「勇敢にも剣で自らを守った」(“she bravely defended herself with her sword”) (*Tales*, I, p.127) という文があり、この文を読んだ翻訳者が「宝剣」を原作よりも多い頻度で翻訳に書き込んだと思われる。戦闘の場面では、「宝剣」を取って戦う姿、馬に「飄と跨り」という表現、「列敷号令」「女將軍」、「豪猛なる勇威」などの言葉を使用して、原作のジャンヌの勇敢さをより際立たせながら、翻訳がなされたと言える。

④ ジャンヌの「慈悲の心」の強調

ジャンヌの美德として強調されたのは勇敢さのみではない。この翻訳において強調されたジャンヌのもう一つの美德は彼女の「慈悲の心」である。

Her parents were too poor to send her to school, and Joan could neither read or write. But she was taught to love God, and to pray to him, so that she became very good, and gentle, and kind to the poor; and many a starving creature has called down blessings on her head, as she has shared with them her scanty meal, or provided them with a night's rest and lodging in her mother's house. (*Tales*, I, p.118-119)

双親甚貧しかりければ其子を学校に送りて芸術を修行さすべき生計無りける程に如安は読書の道に疎く毫も之を習知せざりしが唯常に神を崇み経文を誦するをのみハ教を受け成長に従ひ性質善良柔和にして慈悲の心最深かりけり去は其身の貧究をも顧で克く孤兒巡礼者の如き依頼なくして飢餓困苦する者あれば之を憫み己が食を分て之に与へ路に行暮て難儀する者あれば父母に乞て家に宿し衣を分ち食を推し勞りける程に之が為に凍死餓死を免るる者幾許なるを知らず貧人等皆如安が仁恵を仰き陰徳を称賛をせぬハ無りけり(二編上、一丁ウ〜二丁オ)

ここでも原文が尊重されながら、彼女の「慈悲」を強調して翻訳されたことが判明する。原文で示された、貧しさの中でも、困窮者を見れば自分の食事を分け与え

まず、作楽戸痴鶯の翻訳が、たしかに *Tales of the Great and Brave* を底本としてい
ることを確認したい。原文の説明は時に簡略化されながらも、その記述の順番に
則って翻訳文が作られた。また、この引用部分の前には「黎黒太子義都華は紀元
千三百三十年七月生誕あり」と書かれ、原文にない年代が付加されたのも、「例言」
の説明と一致する。そして翻訳文にある「一点も其悪きと思ふ所に染たまわで」間
然する所なき最も有徳の人」といった表現は、英雄が児童読者の模範たる人物であ
るように、その美徳を強調していると言えよう。それでは、「如安之伝」はどのよ
うに翻訳されたのであろうか。

四・「二編上 仏郎西国女傑如安之伝」の翻訳の相

「如安之伝」は *Tales of the Great and Brave* の第五章「The Story of Joan of
Arc」の翻訳である。一八三八年の初版では原作は全二五頁の短編であり、翻訳の「如
安之伝」は和装本で、二七丁の長さである。

まず全体的に見て、翻訳において大きく省略された原典のテキストがある。つま
り、原典第一巻第五章の最後の約五頁に、原作者が書いたジョージ・ロードンに対
する語りかけは全く翻訳されなかった。その代わりに、「如安之伝」の最後には翻
訳者による読者への言葉、教訓が付された。原典のそれ以前のジャンヌ・ダルクに
関する記述については、段落、頁単位で大きく省略された部分はない。

前章で「初編上 黎黒太子義都華之伝」の翻訳を見た。それと同様に、「如安之伝」
においても、基本的に作楽戸痴鶯は原文の記述の順番に沿って翻訳を行い、原典所
収の物語のプロットを大きく変えることはなかった。「如安之伝」に書かれた、ジャ
ンヌの誕生と幼少時代、オルレアンと王太子シャルルを救う決意、ボードリクール
守備隊長との対面、シノンでの王太子との謁見、オルレアン解放戦、ランス戴冠式、
コンピエーニュでの捕縛、牢獄と裁判、火刑に処された最期、という出来事は、原
作にも同じ順番で記述されている。

しかしながら、この翻訳者は「例言」で、「世間に播布する翻訳書と云もの其文
前後にして快暢ならず」と従来の翻訳の難解さや、「専ら原文に拘泥」する態度を
批判し、「是を訳しつるに其意を取りてなたらかに分解易らむやうにぞ勤つる」と
述べた。この言葉の通り、翻訳文には原文にない事柄の加筆も含め、日本の読者に

内容を伝えるための工夫や教育的配慮も見られる。本稿ではその特徴を四点に整理
し、説明する。すなわち、①フランス史に関する歴史的事実の説明の付加、②ジャ
ンヌ・ダルクに関するエピソードの付加、③戦闘の場面での躍動感、④ジャンヌの
「慈悲の心」の強調である。

①フランス史に関する歴史的事実の説明の付加

原典には、ジャンヌが歴史の舞台上に登場する背景にある英仏百年戦争（一三三七
—一四五三）に関する説明がない。「四百年以上も前」のフランスが長期間イギリ
スと戦争しており、イギリスにフランスの国土の大半の所有権があったことが書か
れた程度である。一〇歳以下の児童読者が理解するには難しいと考えられたのであ
らう。

それに対し「如安之伝」では、百年戦争の発端であるフランス王位継承問題、ス
ロイスの海戦、クレシーの戦い、ポワティエの戦い、十五世紀のヘンリー六世と王
太子シャルル（シャルル七世）との間のフランス王位継承問題など、約三丁半にわ
たり年代も交え詳述された（二編上、二丁ウ〜六丁オ）。また、ランス戴冠式の場
面では、シャルル七世がクローヴィス以来の伝統で「神油」を身体に塗ったという
記述も補われた（二編上、一六丁ウ）。

こうした加筆からは、「例言」での「原文に年記を記せること甚疎かなれば欠く
べからざる所々は他書に因りて補ひつる」という説明が想起され、日本の読者に世
界史の知識を教授しようとする翻訳者の意図が看取できる。

②ジャンヌ・ダルクに関するエピソードの付加

翻訳にはジャンヌに関するエピソードも付加された。おもに三か所である。ま
ず、ジャンヌの生誕地、ドンレミ村の記述である（二編上、一丁ウ）。村の名前に
関する記述すら原典にはない。次に、王太子シャルルと初めての面会時、王太子は
ジャンヌを試そうと臣下と同じ服装を身に着け、その中に紛れたが、ジャンヌは即
座に王太子を見抜き、その足元に跪いたというエピソードである（二編上、九丁オ）。
最後に、ジャンヌの男装に関するエピソードである。つまり、裁判での彼女の罪状
の一つが男装であり、一度は男装をしないと誓約させられ、禁固刑に処された。し
かし「敵中如安を怨むを深き者」が獄中のジャンヌの枕元に男性用の衣服を置き、

Hymns and Sketches in Verse (一八四一) など複数の作品が確認される。またフレイザー・タイトラー家は、歴史家を複数輩出したスコットランドの貴族であり、マーガレットの伯父には、エジンバラ大学の古代史・普遍史担当教授であったアレキサンダー・フレイザー・タイトラー (Alexander Fraser Tytler, *Lord Woodhouselee*, 一七四七—一八一三) がいる。彼は西村茂樹編『万国史略』(一八六九)、『校正 万国史略』(一八七二—一八七六) の原典の一つ、『*Elements of General History, Ancient and Modern* (一八〇一)』の著者であり、明治時代の日本の世界史教育とも縁が深い。

原典第一巻の献辞には、ジョージ・ロードンの「五歳の誕生日」直前の出版であることが示唆され、また「ジョージ・ロードンへの手紙」と題された第一章には、原作者が執筆の際に、ジョージの兄に作品を読み聞かせ、児童にとって難しい言葉をより簡単なものに変えた点も書かれた。原作者はジョージにも「八歳か九歳までに」この作品を読むことを期待し、「難しすぎるのが一切ない」よう配慮した (Tales, I, p.14)。五年後に刊行された第二巻の第一章もジョージへの「手紙」であり、二巻とも本文は児童に語りかけるやさしい調子で書かれた (Tales, II, p.13)。つまり原典には、献辞、「手紙」、本文など、至るところに児童への配慮が見られる。『西洋英傑伝』の翻訳者が児童読者を意識したのは、原典の影響を受けた可能性もある。

次に具体的な内容を見たい。第一巻で描かれた人物は、エドワード黒太子、スコットランドの愛国者ウィリアム・ウォレス、スコットランド王ロバート一世、ジャンヌ・ダルク、イングランド王リチャード一世、チャールズ・エドワード・ステュアート、ネルソン提督、ナポレオン一世の八名である。第二巻では、ポーランド王ヤン三世ソビエスキ、ロシア皇帝ピョートル一世、アメリカ初代大統領ワシントン、ヴェネデの反乱の指導者アンリ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭、チロル独立戦争の英雄アンドレアス・ホーファー、初代ウェリントン侯爵の六名の伝記が収録された。

つまり、『西洋英傑伝』にあるエドワード黒太子、ピョートル大帝、ジャンヌ・ダルク、ワシントン、ナポレオンの伝記を、『*Tales of the Great and Brave*』全二巻はすべて含み、さらに他の九名の人物の伝記も収録された。これは「欧羅巴諸英傑の伝中尤 抽てゐる事業のみを掲げ」たという『西洋英傑伝』の「例言」の説明と一致し、この作品が原典と考えると矛盾しない。

最後に、原文と翻訳文との照応の一例を提示したい。「初編上 鰐黒太子義都華

之伝」と原典第一巻第二章“Life of Edward, the Black Prince”における「エドワードの幼少時代の記述の照応は以下の通りである。

Edward the Third of England and Philippa of Hainault had been married two years, when the birth of an heir to the throne caused the greatest joy throughout all England. The happiness of the young king was excessive, and the pride which he felt in the beauty of the little prince was but commencement of long years of affection, and unwearied efforts to train him in the path of honour, and to fit him for the high station which he hoped he was one day to fill, and to which, even in childhood, he promised fair to be an ornament; for, whilst his father led him to every manly and chivalric exercise, and stored his mind with all the just and noble sentiments with which his own abounded, the somewhat fiery temper and too daring disposition of the king were softened into virtues, in the character of the young prince, by the gentle precepts and example of his mother, Queen Philippa. As he increased in years, and his character became more formed, it was often remarked of him, that, avoiding the faults of either side, he had possessed himself of all the virtues of both his parents: that he had the valour without the rashness of Edward; whilst the feeling heart and gentleness of disposition derived from his mother, so far from subduing that courage, raised it to a yet more noble and exalted feeling. (Tales, I, p.18)

父王母君を婢り給ひしより二歳を経て太子生誕なりけれバ闔国の民衆悦喜ざるはなく殊に父王の御歎喜一方ならで太子の容貌秀美を愛で慈しみ物心つき給ふ頃よりハ誨え導きて倦ることなく終には譲り給ふべき王位に相当せん事を希望て専ら武芸を演習しめらるるに傍又母君の柔和なる性質を交えて教へ導き給へれば太子生長するに従ひ王、妃双親の徳を稟けししも父王の如き苛烈なる事はなくて一点も其悪きと思ふ所に染たまわで只勇氣と母君の温和なるとを兼ね猛烈はおはしけれどもその武を流し兵を弄ふに至らず間然する所なき最も有徳の人となりたまひけり (初編上、二丁オ〜二丁ウ)

「文部省布達・第五八号」（一八七三年四月二九日）の中でその名が挙げられたのである。^(注7)

翻訳者の作楽戸痴鶯（本名・山内徳三郎、一八四四—一九二四）は万国史教科書の翻訳にも関わり、当時としては世界史に精通していたと思われる。^(注8) また語学堪能な人物でもあり、一八七二年には開拓使御用掛（翻訳方）として招聘され、その後お雇い外国人ライマンに付いて石炭産業の発展に尽くした。^(注9)

書名からも分かるように、内容は欧米の歴史的人物の伝記集である。「初編上 驚黒太子義都華之伝」、「初編下 魯西亜大帝伯徳祿之伝」、「二編上 仏郎西国女傑如安之伝」、「二編下 亜墨利加大統領華盛頓之伝」、「三編 仏郎西帝那勃列翁之伝」の全三編六冊で構成される。明治初期の万国史関係の翻訳啓蒙書は「子ども向きに書かれていない」とする見方もある。しかし、『西洋英傑伝』に関しては児童読者も意識された。冒頭に付された「例言」には、読者に関し「経済の責ある諸君子ハいふもさらなり市街の君も児童の伽物語に読聞せぬは育英の楷梯にも成るべく閣龍布が亜墨利加を採出せしは桃太郎が鬼が嶋に渡りしに似るへくもあらず」（初編上、二丁ウ）と述べられ、児童読者に「読聞せ」ることも意識された。さらに、「如安之伝」の末尾では、翻訳者の言葉で、「世間多少の童子能く此書を読む者をして、英傑の功績、賢善の行状を慕はしめ、勉めて一日も之に倣はんの心を奮起せしめん」（二編上、二七丁オ）と「童子」への教育的意図も語られた。

先行研究でも、文章の躍動感と読みやすさが指摘された。府川源一郎は、「日本の軍記物の合戦場面を彷彿とさせるような文体」で、「読み手をぐいぐいと引き込むできあがり」と評した。^(注10) また、高山一彦は、「二編上 仏郎西国女傑如安之伝」について、「さわめて自由・大胆な記述ぶり」でジャンヌを「愛国心」の典型」となる「無双の女勇士」として描いたと述べた。^(注11) こうした児童向け読み物としての性格は、本研究で特定された『西洋英傑伝』の原典にも起因すると思われる。それでは原典はどのような作品なのであろうか。

三 『西洋英傑伝』の原典の特定

結論を先に述べると、『西洋英傑伝』の原典は、マーガレット・フレイザー・タイラー（Margaret Fraser Tyler、生没年不詳）による児童向けの伝記集、*Tales of the Great and Brave*（一八三八）および、*Tales of the Great and Brave, Second Series*

（一八四三）であることが判明した。^(注12) 調査は次のように進めた。まず作楽戸痴鶯による「例言」には、原典に関し次のような記述がある。

此程英人法刺西児氏の著述せる欧羅巴諸英傑の伝中尤 抽てある事業のみを掲げしものを見るに我国人に知らせまほしき節々多ければ「…」是を訳しつるに其意を取りてなたらかに分解易らむやうにぞ勤つる「…」原文に年記を記せること甚疎かなれば欠くべからざる所々は他書に因りて補ひつることも少からず地名の詳悉なるやうに勤めたれど古来より我国人の知らざる国号さへ多ければ地名などに至りてハ図画にて指示せずは心に得がたきことも多かりぬべし（初編上、一丁ウ—二丁オ）

ここで原典について次の四点が判明する。第一に原作者の名が「法刺西児」である点、第二に「英人」という言葉から英語の作品である可能性が高い点、第三に『西洋英傑伝』では、「欧羅巴諸英傑の伝」である原典から「尤 抽てある」物語のみが翻訳された点、第四に原典には年代と地名の情報が少なく、翻訳者がそれらを調査し、翻訳に付加した点である。

この「例言」に加え、先行研究で、原作者「法刺西児」の名の綴りが「Fraser」であると推定されていた。^(注13) また『西洋英傑伝』で描かれたナポレオン一世に関し、一八二一年のセント・ヘレナ島での死に関する記述は本文にあるのに、一八四〇年に遺骸がフランスへ返還された出来事については、三編の末尾で翻訳者が補記した。したがって原典は一八二一年から一八四〇年の間に上梓されたのではないかと予想された。

以上の条件を満たす作品を大英図書館OPACで検索し、候補の作品の内容を検討した。その結果、『*Tales of the Great and Brave*』の内容が、「例言」の記述と適合し、この作品が翻訳の底本とされた可能性が極めて高いことが分かった。

Tales of the Great and Brave は、原作者が友人の息子、ジョージ・ロンドン（George Rawdon）のために書いた児童向けの英雄伝であり、十歳前後の児童が読者として想定されたと思われる。原作者のマーガレット・フレイザー・タイラーは、一八三〇年代後半からおもに児童に向けた歴史物語を執筆したスコットランドの女性作家である。^(注14) *Tales of the Great and Brave* のほか、『*Tales of Mary Lands*（一八三九）』

ジャンヌ・ダルクの表象に時代ごとの社会情勢や理想の人間像が反映されることが明らかにされた。渡邊の研究では、シラーの『オルレアンの少女』の受容が中心的に検討され、『オルレアンの少女』の翻訳により、戦士から愛に悩む少女へと、日本におけるジャンヌ表象が変化すると論じられた。しかし、両者の研究において『西洋英傑伝』におけるジャンヌ・ダルク像については、「(愛国心)の典型」であった点が指摘されたのみであり、作品の内容に深く踏み込んだとは言い難い。

また、明治初期の児童文学研究、教科書研究の分野において、国語教育史研究の観点から『西洋英傑伝』を説明した府川源一郎の研究、初期の世界史教科書として『西洋英傑伝』に言及した木全清博の研究などがある。^(注4)しかしこれらの研究においても、『西洋英傑伝』の原典が不明であったために、翻訳の様相にまで踏み込まれることはなかった。

本稿の特徴は二点ある。第一に『西洋英傑伝』の原典を特定し、「如安之伝」について原文と翻訳文の比較を行うことで、明治時代のジャンヌ・ダルク表象の原点を探る点である。第二に、「如安之伝」をもとにした再話に着目する点である。佐藤宗子によると、再話とは、何らかの原テクストを意識して新たなテクストを文字化する作業、及びその結果生み出されたテクストと定義される。とくに外国文学作品については、原作を一般に紹介する翻訳・翻案を「第一次再話」、「第二次再話」を原テクストとし、その内容を切り取って生成されたものを「第二次再話」と呼ぶ。^(注5)ジャンヌ・ダルクの物語は、厳密には文学作品と呼べないが、「如安之伝」はその後のジャンヌ・ダルク表象にとって「第一次再話」として機能した側面がある。

本稿の構成は次の通りである。第一章では、明治時代におけるジャンヌ・ダルクに関する文献を整理し、ジャンヌ・ダルクが日本に紹介された経緯について説明する。第二章では、『西洋英傑伝』の性質や、推定される読者層について説明する。第三章では、『西洋英傑伝』の原典を特定する。第四章では原典におけるジャンヌ・ダルクに関する記述と「如安之伝」の記述を比較検討し、翻訳の際になされた翻訳者の配慮、およびジャンヌ・ダルクの描かれ方を検討する。第五章では「如安之伝」の再話の一例を示し、その様相を考察する。

一. 明治時代におけるジャンヌ・ダルクに関する文献

明治時代におけるジャンヌ・ダルクに関する文献の多くは、高山一彦、渡邊洋子

によって既に発見され、列挙されている。筆者は本研究を始めるにあたり、両者の研究に基づきながら、新たに発見された文献も加え、二〇一八年九月の時点で判明している明治時代のジャンヌ・ダルク文献について、本稿末の表を作成した(表)明治期に出版されたジャンヌ・ダルクの記事、単行本)。ジャンヌ・ダルクは明治時代の早期より、比較的多くの書籍・雑誌の中で描かれ、現段階で九種の単行本を含む五十種以上の物語・記述が確認された。

ジャンヌ・ダルクが日本に紹介された経緯は概して次の三種に分類される。第一に『世界蒙求』(一八七三)や師範学校編『万国史略』(一八七四)といった、歴史教科書におけるフランス史の記述によってである。第二に、列伝形式で書かれた英雄伝・偉人伝のアンソロジーによってである。『西洋英傑伝』のほか、エドワード・クリシーの *The Fifteen Decisive Battles of The World* (一八五二) を原典とする『万国有名戦記』(一八八四)、『泰西十五大決戦史』(一八九〇) がそれに相当する。第三にジャンヌ・ダルクを対象を特化した伝記的著作や文学作品の翻訳・翻案によってである。最初のもはジャンネット・タッキーの *Joan of Arc: The Maid* (一八八〇) を翻訳した粟屋関一『回天偉蹟 仏国美談』(一八八四)であり、その後はフリードリヒ・フォン・シラーの *Die Jungfrau von Orleans* (一八〇一) を翻訳した、MSS生「オルレアンのをとめ」(一九〇一)、藤沢古雪訳『悲劇 オルレアンの少女』(一九〇三)が続く。このように、原典がある程度明確となっている作品以外のものについては、再話の方法が取られた作品も多いと推測される。

その意味でもやはり、初期のジャンヌ・ダルク文献であり、初めての単行本であった『西洋英傑伝』の「如安之伝」の記述は着目に値し、影響力が大きかった可能性もある。それでは『西洋英傑伝』とはどのような作品なのであろうか。

二. 『西洋英傑伝』について

『西洋英傑伝』(一八六九)は、明治時代初期の世界史教育と国語教育に貢献した翻訳啓蒙書の一冊であり、児童から成人まで広範な年齢層の読者を持ったと考えられる。世界史教育の面では「学制」頒布直後、官版万国史教科書が未編纂の時、教科書として使用された書物の一冊であった。^(注6)国語教育の面では、初期の小学校で使用される本の一冊に文部省から指定された。つまり、「小学校教則」(一八七二年九月)で指定された教科書に加え、教育現場で読まれる「読方之部」の「課業書」として

明治時代初期の児童向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの表象 —『西洋英傑伝』を中心に—

渡辺 貴規子

千葉大学・教育学部 日本学術振興会特別研究員PD

Representation of Joan of Arc in the Children's Book of Early Meiji Era Study on *Seiyō Eiketsu Den* (*Tales of Western Heros*)

WATANABE Kimiko

Faculty of Education, Chiba University, JSPS Research Fellow (PD)

『西洋英傑伝』(一八六九)所収「二編上 仏郎西国女傑如安之伝」(以下、「如安之伝」)は、明治時代の日本に最初にジャンヌ・ダルクを紹介した書物である。この作品は明治時代の児童文学作品におけるジャンヌ・ダルク表象の源である点、それ以後のジャンヌ・ダルク伝において再話の対象となった点で重要な作品であった。また、『西洋英傑伝』は明治初期の世界史教育・国語教育に資した翻訳啓蒙書の一つであったが、これまで原典が特定されなかったため、この作品に込められた教育的な意味や翻訳者の教育的配慮は明らかにされてこなかった。本稿では『西洋英傑伝』の原典を特定し、原作と「如安之伝」を比較検討することで、翻訳にこめられた教育的配慮、児童の模範として提示されたジャンヌ・ダルク像の特徴を明らかにする。また、「如安之伝」をもとに再話された物語との比較も行い、その様相を明らかにする。

キーワード……近代文学 (Modern Literature) 児童文学 (Children's Literature) 翻訳 (Translation) 再話 (Retold Stories) ジャンヌ・ダルク (Joan of Arc)

はじめに

本稿の目的は、明治初期の児童向けの読み物におけるジャンヌ・ダルク表象の様相を明らかにすることである。その具体的な研究対象として『西洋英傑伝』(一八六九)に収録された「二編上 仏郎西国女傑如安之伝」(以下、「如安之伝」)におけるジャンヌ・ダルクの表象を検討する。

本研究は、近代日本児童文学におけるフランスの英雄の表象について調査する一環として始められた。英仏百年戦争の末期にフランスを救った英雄とされるジャンヌ・ダルクは、明治・大正時代の児童雑誌、児童向け叢書の中で多く取り扱われた英雄である。その言説を分析する上で、そもそもジャンヌ・ダルクは日本にどのよ

うに紹介されたのか、その源を明らかにすることは大きな課題であった。

管見の限りでは、「如安之伝」は、明治時代の日本に最初にジャンヌ・ダルクを紹介した書物である。そして、ある程度の記述量をもった、児童読者も意識された文学的な作品であり、それ以後のジャンヌ・ダルク伝の内容にも影響を与えた点で、重要な作品である。

先行研究では『西洋英傑伝』や「如安之伝」に関し、十分に分析・検討が加えられたとは言い難い。日本におけるジャンヌ・ダルクの文学表象に関する研究は少ないが、その中でも、西洋史家の高山一彦と、比較文学者の渡邊洋子の研究からは、明治時代のジャンヌ・ダルク表象に関し、多くを学ぶことができる。高山の研究では『西洋英傑伝』から大正時代初期のジャンヌ・ダルク文献について調査がなされ、(7)